

温暖化防ぐ固形燃料



上

に吸収したCO₂量と同等であることから、大気中のCO₂が増えないという。温暖化防止にも役立つ燃料として注目され、ストーブ、ボイラーなどに利用されている。

金谷さんは砺波市出身。大学卒業後は東京の環境コンサルタ



出来上がったばかりのペレットと金谷寿春工場長＝富山市中大浦

木質ペレット

富山市中心部から南へ車で約30分。富山市中大浦にある丸新志鷹建設（立山町）の木質ペレット工場には、長さ4倍ほどのスギの間伐材が積み上げられていた。金谷寿春工場長（45）は「これから新たな資源に生まれ変わるんですよ」。

木質ペレットは、木材を細かく粉状に砕き、高熱で圧縮した固形燃料。まきより持ち運びが簡単で、燃焼効果も高いとされる。燃えた時に出る二酸化炭素（CO₂）は原木が成長する際

温暖化防止に役立つ暖房器具を使いたい」と考えていたところ、知人からペレットストーブを教えられた。赤く燃える炎が美しく、まきに比べて手間がかからない上に石油にも負けないくらい室内も暖まった。だが、当時は県内で使用する人はおらず、ペレットは長野まで買い出しに行く必要があった。

「県内でも普及すれば良いのに」。そう感じていたところ、丸新志鷹建設から工場長就任を打診された。個人でペレットの使用経験があり、森林組合に勤務して木の扱いに詳しいことが理由だった。「使っているからこそ良い商品が作れるはず」。2010年の操業開始と同時に引き受けた。

最初はノウハウがなく、失敗の連続。木材を乾燥させてから加工するが、季節や天候で乾燥に必要な時間は変わる。ペレットは直径6ミ、長さ3ミ。わずかな違いで燃え方が悪くなる。

自信を持って売れるペレットが出来るまで約1年かかった。

商品名は「とやまペレット」。材料はすべて県内で出るスギの間伐材を使用している。最初の10年度の生産量は1000トンだったが、昨年度は約8000トンまで増加。現在は1日約5〜6トンを生産し、冬の需要増に対応するため夏も製造を続けている。主な販売先は東富山温水プール、県中央植物園などの公共施設が多いという。

将来的には年約1千トンの生産を目指す、今年のような暖冬で原油安が続くと「正直厳しいですね」と苦笑い。それでも、「温暖化防止に役立つ自然エネルギー」として、今後も地道に売り込みを続ける。（井滝克弘）

◇ 15、16日に富山市で主要7カ国（G7）環境相会合が開かれる。県内で展開されている環境に配慮した活動の中から、新たな取り組みを紹介する。